

別れの言葉

寺 川 央

関西大学に専任として勤めて、すでに4半世紀。そして今春には、停年退職となり、さすがに感ひとしお。途切れ途切れの走馬燈に身をまかせていると、今はこの世から去られた先生方や、同僚、友人たちの姿が、次々に浮かんできます。古稀に際して、略歴と研究業績を書くようにと、おすそめを得て、そしてまた、あらためて、既にお書きになった先生方の記念号を拝見すると、やはり、にわかには、その間の年月の重さを書く筆も鈍るようです。ただドイツ語学に志した時については、いささかの感慨もあり、また先に、関西大学出版・広報部から依頼を受け、ラジオ関西から、ラジオ番組「今晚は！みなさん」の中で放送された稿をたよりに、その御許しも得て、その極く一部を再現し、ここにあらためて、御教導、御厚誼をいただいた方々に心から御礼を申し述べたいと思います。

『今晚は！』

私にとって「今晚は！」というこのことばは本当になつかしい響きをもっています。丁度35歳の夏でした。それまで十数年も中学校で子供たちと一しょに、キャンプだの、登山、ハイキング、スキー、コーラス、ラグビー、水泳と遊びまわっていた私でしたが、或る日ふと思いました。生徒たちには勉強するんだよといいながら、自分の方はもう安全地帯にいて何もしていないじゃないか。そこで思いついたのが、それこそ20年も前、戦争末期に旧制高校で習ったドイツ語でした。当時はサボってばかりいて、教科書もろくに買わず、いい加減にすごしたあのドイツ語とは自分でもふしぎなのですが、早速夏休みの講習会に入れてもらって、辞書を十数年ぶりに引きながらやってみると、これが実に面白いのですね。それまでのスポーツも遊びもみんな忘れて夢中です。とうとうその

次の年の春から夜学の3年生に編入学させていただくようになりました。旧制大学の法学部を出たのが昭和25年でしたから、もう14年ぶりの大学生活です。夕方30分ばかりの電車で大学に向かう途中、じっと目をして英語の教師からドイツ文学科の学生に早変わりです。しかし夜学の方は学生が一人、二人でしたから大へん。絶対に予習をしてゆかなければなりません。だが1部と全く同じ先生が同じ講義をもって下さるのは幸せでした。こちらが休むと先生の方も講義がなくなるわけで、職員会議が長引いたりすると電話でおことわりするのです。時には老教授と往きがいっしょになりますと、「あなたと行って始めて講義が成り立つのだから、ちょっとお茶を飲んでゆきましょう。」コーヒーを御馳走になって、さて教室に入ると先生は教壇の上へ、こちらは下に座って、あらためて「今晚は！では今日のところを読んでごらん」といわれるのでした。また別の先生は、寒い1月頃でしたが、最終の9時半までの講義にもたった一人の学生の私のために、もうストーブに石炭の切れた冷たい教室でじっと訳読を聞いて下さるのでした。10時前まで続けて下さって、学校中で私達だけになった時、守衛さんがまちかねて教室の戸口に立って「おやすみなさい」と二人にあいさつされたのが心にしみる夜でした。

夕映えの中を大学へ急ぎ、校門を出る時には、スモッグの空にもかすかな星が光っています。今日もがんばれたなあとしみじみ心にかみしめながら、時には数少ない級友とお茶を飲んだりします。さてそれからが大へん。11時近くに帰宅して入浴、夕食。もっともまだ独身でしたからたすかりました。12時から明日の予習です。当時2時半までの深夜放送をかけ、それがすんで3時、4時になることもありました。そして6時半にはもう起きなければなりません。全くその時までスポーツで鍛えた体力を1日1日すり減らしてゆく感じでした。でも昼間の中学生達との生活も楽しかったし、夜は夜で充実感がいっぱいでしたから、本当に夢中。日曜の朝だけぐっすりと眠って、全く苦しい、しかもすばらしい日々でした。

しかしかつての学生時代にはラグビーやコーラス、その後はスキーや山や旅に打ち込んでいたのも少しも悔いはしません。いわゆる勉強から遠い生活も、それが友情の深さを知り、身体の鍛練やサクリフェイスや

ファイティングスピリットを学び、また自然の美しさに打たれた日々とすれば、やはりすばらしい人生なのです。もう若い頃のような激しいスポーツもできず、体力の限界を感じるようになってみると、それはまたかけがえのない青春のひとつときだったことがしみじみとわかるのです。でも30歳をすぎて突然新しい外国語をいくつか学ぶとなると、理解する力はかなりあっても、記憶力だけは、情けない程ですね。若い時に遊んでいても、それが一所けんめいに遊んでいたのなら年をとってから取返しがつかかもしれませんが、やはり若い時でないとできないこと、また反対に年がたってからでないといけないこともあるものですね。

『ドイツ文法』

私の最初の大学生活は法学部で、株式会社法を勉強したことになるのですが、次にドイツ文学科に編入学したときには、もちろんドイツ文学を勉強したいということでした。それが卒業論文を書くころになって気がついたのは、一つの疑問、つまり昭和19年にはじめてドイツ語を習ったときの文法と、昭和39年にもう一度大学で読んだドイツ語の文法書がほとんどちがっていないということに対するおどろきでした。もっとも文字はドイツ文字、いわゆる亀の甲文字からローマ文字にかわってはいましたが、内容はほとんど同じように思われたからです。なぜかといって、日本語の場合も、あの終戦をさかいにした漢字や仮名づかいの変革はもちろん、表現のしかた、つまり語法や文体がまるきりちがっていますから。戦前の独和辞典が、現代文学の場合、とくに戦後の人たちの作品になると、役立たないところの多いのにもまもなく気付きました。とにかく現実のことばかりかわっているのに文法が同じというのはおかしいことです。すぐにそれに関して先生からさまざまな文献とその方向を教えていただいたのは幸せでした。たしかに1950年代から文法そのものの存在価値まで、疑問の対象になり、もし文法がありうるのなら、もっとひろく人間の考え方、ドイツ語を通じての思考方式もまたその中に入るのでないかということが認識されていたのです。そしてまたこれだけ社会構造がかわって、大都市の出現や、工業社会、資本主義の進展がみられると、当然その言語構造も変わってくるはずですね。

それにつけても一番むずかしいのは初等文法だということです。中学校で習いはじめるころの英文法の基礎にしてもそうです。何が基礎かということに対する問いかけと把握がない限りこれを適確に指導することは全く不可能でしょうから。

略 歴

1928年（昭和3年）3月16日、大阪の商家に生まれる。

1940年大阪府立北野中学校（旧）入学。

1944年同校4年修了。甲南高等学校文科乙類入学。

1946年2月戦災のため山口高等学校へ転学。

1947年同校卒業。京都帝国大学法学部入学（旧制、同5月京都大学に名称変更）。

1950年同法学部卒業。

1951年より吹田市立第三中学、豊津中学、第一中学に（英語科教諭として）勤務。

1964年関西大学文学部独逸文学科3年（2部）へ編入学。

1966年同卒業。関西大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ文学専攻）入学。

1968年同修士課程修了。吹田第一中学退職。近畿大学教養部専任講師（ドイツ語）。

1971年同退職。関西大学文学部助教授。

1978年関西大学文学部教授。

1980年文学博士（関西大学）。「レオ・ヴァイスゲルバーの言語理論と日本におけるその受容について」

この間、主な役職として次の通り勤務：

1972年関西大学文学部学生相談主事。

1975年関西大学文学部学生主任（2部担当）。

1981年文学部長代理。

1986年入学試験委員。入学試験実行副委員長。

1988年吹田市教育委員。

1991年吹田市教育委員長（1992退任）

研究業績

- 1968 Inhaltbezogene Wortbildungslehre からみた Wortstand と Wortnische の概念——特に be-Nische の問題についての考察(千里山文学論集創刊号 関西大学大学院文学研究科院生協議会)
- 1968 Wortnische として見た-gen 動詞の一考察(ドイツ文学論攷第10号 阪神ドイツ文学会)
- 1969 現代の Syntax からみた Wortstand の機能について(独逸文学第14号 関西大学独逸文学会)
- 1970 Satzwort としての抽象名詞の機能について(ドイツ文学第44号 日本独文学会)
- 1970 ドイツ名詞文体にあらわれた抽象名詞の機能について(文体論研究第16号 日本文体論協会)
- 1971 言語の規範と変遷—その現実的用法からみた Ausklammerung の問題について(独逸文学第16号)
- 1971 ドイツ語名詞構文の文体的価値について(文体論研究第17号)
- 1971 最近のドイツの意味論研究からみた Porzig の意義について(関西大学文学論集第21巻第1号 関西大学文学会)
- 1972 Tempus と Temporalität—いわゆる Ästhetenpräteritum を中心にして(ドイツ文学論攷第10号)
- 1974 Passiv の本質について(その一) (独逸文学第19号)
- 1978 語——その一体性について(関西大学文学論集 第27巻第4号)
- 1979 Passiv の本質について(その二)——特に sein+zu+Inf.-Gefüge を中心として(独逸文学第23号)
- 1979 日本におけるヴァイスゲルバー研究(ドイツ語教育部会会報第15号 日本独文学会教育部会)
- 1982 レオ・ヴァイスゲルバーの言語理論と日本におけるその受容について(1)(関西大学文学論集 第31巻第3,4合併号)
- 1983 レオ・ヴァイスゲルバーの言語理論と日本におけるその受容について(2)(関西大学文学論集 第32巻第4号)
- 1986 LL の検証—視聴覚教育開設20周年を機に(関西大学視聴覚教育第10号 関西大学視聴覚教室)
- 1991 各国の文体論—回顧と展望(ドイツ) (日本文体論協会編 「文体論の

- 世界」三修社)
- 1991 各国の文体論—各国の文献解題(ドイツ) (同上)
- 1991 ドイツ言語学辞典(共著)Sprachpflege 他10項目執筆(紀伊国屋書店)

翻 訳

- 1973 ギュンター・ヴェンク：日本語のシンタックスにおける感嘆文(国文学第49号 関西大学国文学会)
- 1975 ポルツィヒ・トリーア・ヴァイスゲルバー：現代ドイツ意味理論の源流(共訳)(大修館書店)
- 1986 ヘルムート・ギッパー：言語学の基礎概念と研究動向(共訳)(三修社)

書 評

- 1973 ヴェルトブルク：言語学の問題と方法(雑誌「言語」 大修館書店)
- 1976 Gedenkschrift für J. Trier(ドイツ文学論攷第18号)
- 1977 特集 ことばの名著：レオ・ヴァイスゲルバー：言語と精神形成(雑誌「言語」大修館書店)
- 1988 Oeuvre de Recherche en Linguistique Germanique (Nice):Das Passiv im Deutschen (Tübingen 1987)(ドイツ文学論攷第30号)

口頭発表

- 1966 Inhaltbezogene Wortbildungslehre からみた Wortstand と Wortnische の概念(日本独文学会)
- 1967 Wortnische として見た-gen 動詞の一考察(日本独文学会)
- 1968 現代のシンタックスからみた Wortstand の機能について(日本独文学会)
- 1969 Satzwort としての抽象名詞の機能について(日本独文学会)
- 1969 ドイツ名詞文体にあらわれた抽象名詞の機能について(日本独文学会)
- 1970 言語の規範と変遷—その現実的用法からみた Ausklammerung の問題について(日本独文学会)
- 1970 ドイツ語名詞構文の文体的価値について(日本文体論協会)
- 1970 最近のドイツの意味論研究からみた Porzig の意義について(日本独文学会西日本支部)
- 1971 Tempus と Temporalität—いわゆる Ästhetenpräteritum を中心にして(日本独文学会)

- 1978 sein+zu+Inf. -Gefüge をめぐる文体的諸問題について(日本文体論協会)
- 1979 戦後ドイツ語学研究史について(関西大学独逸文学会)
- 1981 たとえば三つの Deutsche Syntax について(関西大学独逸文学会)